

伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(四)

—(寛永一二年)御参宮人帳—

船 杉 力 修

解題にかえて

本稿では、『社会システム論集』第六号に引き続き、三重県伊勢市浦口の来田尚親氏所蔵文書のなかの、寛永一一(一六三四)年(推定)の「御参宮人帳」を取りあげる。本稿では、正月朔日から三月二〇日までを紹介する。

〔史料の性格〕

この史料も断簡であり、表題はすでにみられない。来田新左衛門家文書のなかで、明和五(一七六八)年の「一志郡・度会郡御参宮人帳」と表題のある史料をみると、参宮人の在所、人数、費用(御初穂、御神楽料、御祝儀など)、月日など、来田新左衛門家に宿泊した参宮人に関して詳細な記載がみられる。その記載内容は、本史料と極めて類似していることから、表題は翻刻にあたり仮題としてつけたものである。

江戸時代の伊勢信仰については、従来おかげまいりやええじやないかといった伊勢参宮そのものの分析、伊勢参宮日記による参宮ル―

トの変遷など、伊勢参宮が盛んであった中後期を対象とした研究が多く、江戸初期については九州地方での分析(久田松、一九九六、一九九七)を除けば、それほど明らかにされていない。

安永六(一七七七)年の「外宮師職諸国旦那家数改覚」(皇學館大學史料編纂所、一九八六)によれば、国別に檀那をもつ御師数をみると、伊勢・東海・畿内で多いことから、伊勢神宮に近接した地域で、御師の活動が活発であったと指摘されている(藤本、一九八九)。したがって江戸初期における伊勢信仰の展開を検討するためには、まず伊勢信仰が盛んであった伊勢神宮周辺地域を対象としてとりあげる必要があると考えられる。本稿でとりあげる来田新左衛門家では、安永六年において、檀那が摂津・讃岐・山城・伊勢・阿波などに二二五二七軒あり、そのうち摂津国が一三八四〇軒と全体の六一%を占めていたことが分かる(第一表)。

この史料には、村(講)ごとの参宮人の数や参宮人の代表者の名前が詳細に記されていることが注目される。従来の研究においても(新城、一九八二)、村のなかで、どれくらい伊勢講に加入したり、伊勢参宮を行なったかについて分析されてきた。江戸中後期の畿内

第1表 安永6(1777)年
における米田新左衛門家
の国別檀那数

国名	檀那数(軒)
摂津国	13840
讃岐国	4800
山城国	2500
伊勢国	600
阿波国	200
その他	587
合計	22527

「外宮師職諸国且方家数改覚」
 (『神宮御師資料外宮篇四』)
 所収より作成

注1) 各国ごとの檀那数は概
 数。

注2) 合計は実数。その他は
 合計より各国の檀那数を引
 いた数である。

農村では、伊勢講の普及度が高く、「全戸的参宮」が普遍化してい
 たと指摘されている(新城、一九八二、一一五九〜一一六〇頁)。

しかしながら、こうした伊勢参宮の盛行が、どれくらい遡るのかに
 ついては史料の制約もあり、明らかにされているとはいえない。ま
 た、参宮人の属性について、検地帳などにより各村での経済的階層
 から検討するだけでなく、本家・分家の関係や村の役職への就任状
 況など社会的な属性についても検討する必要があると考えられる。

以上のように、この史料を分析することによって、伊勢信仰が盛
 んであったと考えられる伊勢神宮の近接地域における、江戸初期の
 伊勢参宮の実態を復原することができる。また「御参宮人帳」に記
 載された人が、それぞれの地域のなかでどのような社会・経済的地
 位にあったかについて分析することによって、伊勢信仰の地域への
 浸透状況についても明らかにすることができる。

「史料の成立年代」

表題もすでに失われていることから、この史料の作成年代につい
 ては直接示すものはない。しかしながら、年代を推定する手がかり

がいくつか存在する。まずは一点目は、閏月の存在である。この史
 料には正月から十二月の参宮人が記されているが、閏月があり、七
 月がそれに該当している。江戸期に七月が閏月であるのは、寛永一
 一年、享保六年、元文五年、宝暦九年、安永七年、寛政九年、天保
 六年、安政元年の九つである。

また、この史料の末には「御初尾同替金銀ノ覚」、すなわち米田
 新左衛門家に届いた初穂の一覧があり、そのなかに「戌ノ年分、亥
 ノ七月ニ到来ス」と記されたところがある。つまりこの「御参宮人
 帳」の作成年代は、閏月が七月で、戌年であると想定される。江戸
 期においてそれに該当するのは、寛永一一(一六三四)年、安永七
 (一七七八)年の二つである。

第三には、この史料に記載される人名が挙げられる。まず正月一
 ○日に代参をさせた伊賀上野の加納藤左衛門が注目される。加納藤
 左衛門については、久保文武『伊賀史叢考』(一九八六)に詳しく
 触れられている。加納家は中世には近江国坂田郡加納村(現在滋賀
 県長浜市加納町)の地頭であったといわれる。文禄元(一五九二)
 年に加納直成は、藤堂高虎に召し抱えられ、初め一〇〇石であった
 のが、朝鮮の役、関ヶ原、大坂の陣で戦功をたて、二〇〇〇石を得
 ることとなった。藤堂家が伊勢・伊賀に移封すると、伊賀へ移り奉
 行(加判奉行)をつとめた。寛永一三年直成の死没により、子直盛
 が家を継ぎ、同じく奉行となり、一八〇〇石を給した。直盛は伊賀
 郡美旗新田(現在三重県名張市)の開発に尽力し、寛文一一(一六
 七二)年には一〇八町余りの田畑が開墾された。その功に対して享
 保一六(一七三二)年に加納神社が建てられたという。延宝元(一

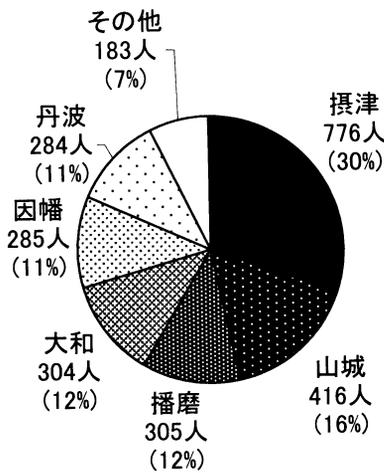
六七三)年直盛の死去により、子直堅が家を継ぎ、同じく加判奉行となった。しかしながら、延宝八年伊賀上野を揺るがす大事件が起こった。伊賀上野の城方・町方の協同により進められた備中国での銅山開発事業への藩米の投資が、津藩に知らされることなく進められ、失敗に終わったというものである。この計画には加判奉行加納藤左衛門直堅も深く関与していたことから、翌年(延宝九年)に切腹、子供も同罪(斬罪)となり、藤左衛門家は断絶となったのである。

名古屋大学附属図書館所蔵の神宮皇學館文庫には来田新左衛門家の文書がかなり含まれているが(拙稿、一九九九)、そのなかに寛永七年の「太神宮道者御被賦帳」と題する史料がある。この史料にも、加納藤左衛門の記載があり、「近江加納衆、藤堂大学殿家中、伊賀上野二御入候」と記され、伊賀上野で伝える由緒と一致していることが分かる。「御参宮人帳」と「太神宮道者御被賦帳」と一致する人名は加納氏のほかにもみられる。「太神宮道者御被賦帳」に「越後千代様家中」とある山岡久左衛門は、「御参宮人帳」にも末尾の初穂一覽に「越後山岡久左衛門殿御はつほ」と記載がある。松平光長は寛永元(一六二四)年に越前北庄から高田へ移封し、延宝九(一六八二)年に越後騒動により、改易となっていることが注目される。さらに「太神宮道者御被賦帳」に「白川丹羽五郎左衛門殿家中二御入候」とある山本半右衛門は、「御参宮人帳」にも「白川山本半右衛門殿」とある。白河藩は寛永四年(一六二七)年に丹羽長重が陸奥国棚倉から移り築城してできた藩で、その後寛永二〇(一六四三)年には長重の子光重が同国二本松に移封されている。

加納、山岡、山本以外にも、両者には共通する人名が多数記載され、しかも筆が同筆であるとみられる。以上のことから、この史料の作成年代は、寛永一年と推定される⁽⁴⁾。この両者の史料を比較・検討することによって、従来あまり明らかでなかった、江戸初期における伊勢御師による配札、そして伊勢神宮への参詣など、伊勢信仰の詳細について復原することが可能となるだろう⁽⁵⁾。

「参宮人の分布」

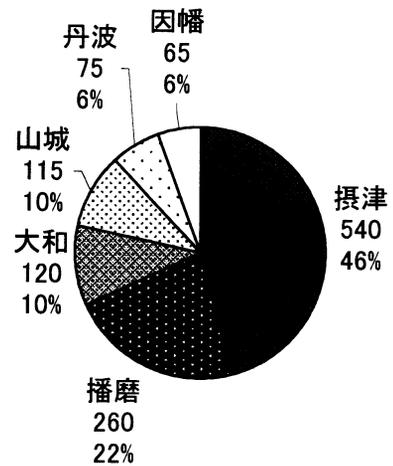
寛永一年における来田新左衛門家への宿泊者数について、国別に集計したのが第一図である。摂津が全体の三〇%を占め、次いで山城が一六%で、以下、播磨、大和、因幡、丹波いずれもほぼ一〇%となっている。当時の檀那の分布を直接示す史料はないものの、寛永七年の「太神宮道者御被賦帳」に記される「諸国切文ノ覚」が参考となる。「切文」の数の後に「講文共二」と表記があったり、



第1図 寛永11(1634)年来田家「御参宮人帳」による国別の宿泊者数

「此外二折紙十斗入」といった記載があることから、これらは檀那や伊勢講に対して御祓や土産を渡す際に書かれた御師の書状であると考えられる。⁽⁶⁾ 御祓や土産の配布状況をみてみると、「折紙」は「万度」、「千度」の御祓とともに配られているように、武士のなかでも上級武士に配布されている。一方、上級武士に仕えた者と考えられる「業者」には、御祓が配られたものの、「文なし」とあることから、全ての檀那に書状が送られたわけではなかった。以上のことから「切文」とは、切紙、すなわち和紙を二つに折り、折り目どおりに切り離れた紙に書いた書状のことを指すと考えられる。この数値は、檀那数全体の数ではなく、有力檀那と、村あるいは講の数とを指していると考えられ、その分布をみると、地域ごとのおおよその檀那の分布状況を類推できると思われる(第二図、第二表)。

切紙の分布をみる(第二図)と、撰津が全体の約半分を占め、その次が播磨(二二%)、以下大和・山城・丹波・因幡と続いている。また上級武士など有力な檀那に書かれた折紙は、四分の三を撰津が占めている(第二表)。つまり、江戸初期における来田新左衛門家の檀那は、畿内およびその周辺地域で構成され、そのなかでも、撰津を中心に分布されていたことが分かる。宿泊者の分布(第一図)と比較すると、檀那の分布と同様に、撰津が第一位となっている。その一方で、第二位以下は必ずしも檀那の数と同じような構成とはなっていない。山城国久世郡寺田村(現在京都府城陽市)では、講の加入者全員が参宮を行う「講参り」があり、村のなかのいくつかの講がまとまって五年から七年ごとに一回参宮していたという。また元禄から宝永期には、参宮は村の南と北で分かれ、同じ年に日をす

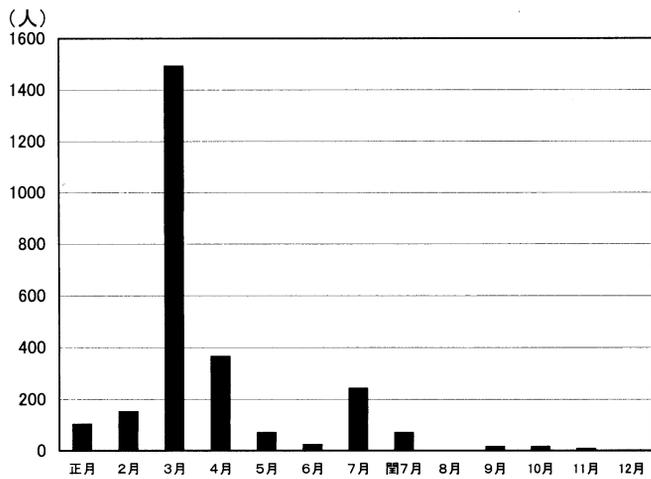


第2図 寛永7(1630)年来田家「太神宮道者御祓賦帳」における御師書状(切紙)の国別分布

第2表 寛永7(1630)年来田家「太神宮道者御祓賦帳」における御師書状の国別分布

国名	切紙	折紙
撰津国	540	90
内 二郎右衛門方	260	80
内 五右衛門方	170	10
内 半右衛門方	110	0
播磨国	260	5
大和国	120	10
山城国	115	16
内 西分	70	10
内 東分	45	6
丹波国・同近在	75	1
因幡国	65	0
合計	1175	122

らして出立していたとされる(城陽市教育委員会、一九八八)。「講参り」は「総参り」とも呼ばれ、近畿地方で広く行なわれていたことがすでに指摘されている(新城一九八二、一一六二頁)。実際の「御参宮人帳」には講の記載が多数あり、また一地域からの一回の宿泊者が五〇名を超える事例もかなり存在していることから、



第3図 寛永11 (1634) 年来田家「御参宮人帳」にみられる月別宿泊者数

第3表 宿泊者数の集中する時期における国別宿泊者数 (人)

国名	3月	4月	7月	年間総数
摂津	524	151	2	776
山城	241	42	4	416
大和	237	41	8	304
播磨	187	100	0	305
丹波	210	12	0	284
因幡	3	0	238	285

(寛永11年来田家「御参宮人帳」より作成)

「講参り」の有無が宿泊者の数と関係していたと考えられる。寛永期の宿泊者の数、御師書状の数の分布は、先に記した、安永六年(一七七七)年の檀那分布(第一表)と比較すると、あまり一致がみられない。具体的には、安永期には摂津国の割合が六一%と非常に高くなっており、次いで讃岐二一%、山城が一%と続いている。また寛永期でみられた播磨・大和・因幡・丹波がみられなくなっている。これは来田家の本分家、あるいは他家との間で檀那の交換・売買などが行なわれたためではないかと考えられる。御師間

での檀那の売買については、道者売券の存在により、一五世紀末期から一六世紀中期にかけて活発に行なわれたことが指摘されている(萩原一九六二、西山一九八七)が、江戸中期での檀那の交換・売買についても、今後江戸期における伊勢信仰の展開を考える上で注目する必要があると思われる。

「参宮の時期」

『御参宮人帳』をもとに、寛永一一年における月別の宿泊者数を第三図に示した。閏七月が存在するものの、宿泊者数が明らかに集中する時期がみられる。まず正月から四月までにかけて集中がみられ、五月・六月は一度落ち込むものの、再び七月に増加し、八月から十二月はほとんど宿泊者がみられなくなる。特に三月に集中がみられ、宿泊者二五〇人余のうち、五八%、一五〇〇人近くにも及んでいる。第二位の四月を加えると七二%となり、参宮は三月、四月にピークを迎えていたといえる。すでに指摘がなされているように(久田松、一九九六)、この時期は、五月に始まる田植え以前の農閑期に該当すると考えられる。実際、摂津国八部村白川村(現在神戸市須磨区)においても、宝暦八(一七五八)年の明細帳をみると、「五月節

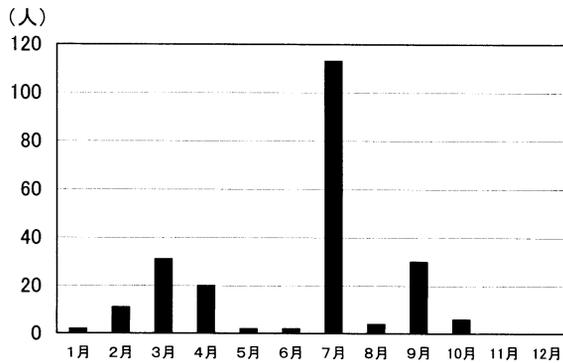
前後二植付」とある(神戸市教育委員会、一九七八)ことから、この史料でも三月は農閑期であると考えられる。さらに、宿泊者が集中する三月・四月・七月の宿泊者数を、地域別に検討すると(第三表)、地域ごとに違いがみられる。三月は、畿内でおおむね六五%前後となっているが、大和や丹波では七〇%を超えている。四月は丹波(四%)、大和(一〇%)であるのに対し、播磨(三三%)、摂津(一九%)と若干高くなっている。七月では、畿内ではほとんど宿泊者数がみられないのに対して、因幡では八三%とほとんど七月に集中していることが分かる。こうした地域差が、地域ごとの農閑期の違いによるものなのか、事例を蓄積してさらに検討する必要があると思われる。

宿泊者が特に集中した月・日を多い順に並べてみると(第四表)、ほとんど三月に集中していたことが分かる。一番多い七月二四日は一九〇人すべてが因幡であり、因幡国の檀那が集団で参宮を行なったと考えられる。一〇〇人を超える日を検討すると、三月二二日は、摂津多田庄の山原三七人、仁部一七人、南田原四四人と、多田庄から総勢九八人、三月一七日では丹波氷上郡御野下村から五四人、山城北稻八妻村から四六人など、というように、これらは講員総出

第4表 宿泊者が集中した月・日(1日の宿泊者が50名以上)

月・日	宿泊者数
7月24日	190
3月22日	135
3月17日	126
3月27日	115
3月12日	103
4月1日	100
3月18日	95
3月10日	94
3月8日	91
4月17日	82
3月21日	71
3月24日	69
正月1日	67
3月20日	63
2月19日	58
3月25日	57
3月9日	51

(寛永11年来田家「御参宮人帳」より作成)



第4図 天正18(1590)年福島家「天正十六年参宮帳」(豊後・肥後・日向)による月別宿泊者数

の「講参り」であったとみられる。三月一二日には氷上郡成松町市場から七〇人、四月一七日には摂津国水堂村から六五人と、六〇名を超える集団が一举に宿泊するケースもあった。また正月朔日に六七人と比較的人数が多いのは、すでに指摘されているように(新城一九八二、一一六二頁)、年越参り、すなわち初詣であると考えられる。安永年間には、いずれも摂津の檀那で、七〇〇人とおぼ一定していたとしている。寛永期においても六七人であるので初詣の数は一定していたとみることもできる。しかし、分布をみると、寛永期には丹波、伊勢、山城、播磨など多くの地域から参詣客が訪れていた。以上のように初詣がすでに江戸初期に慣習化していたことは注目される。

さらに、別の時期の「御参宮人帳」と比較してみた。「天正十六年参宮帳」(大分県史料刊行会、一九六四)は、外宮御師福嶋御塩大夫家の天正一六(一五八八)年から天正一九年までの四年間の参宮人を記した史料で、豊後国を中心に肥後・日向の参詣者の名前が月・日ごとに記されている。ほぼ一年にわたつ

て書かれている天正一八年の参宮人について月別の動向を検討したところ（第四図）、寛永期と差がみられた。天正一八年では、七月が五一％で最も多く、ついで三月（一四％）、九月（一四％）、四月（九％）と続いている。農閑期である三月よりも、七月や九月に宿泊者が多いのは、農民よりも武士など有力者の参宮が多かったことが一理由として考えられる。

また、天正一〇（一五八二）年から元和九（一六二三）年にわたる外宮御師橋村家の「御参宮人帳」（天理図書館所蔵）の分析（久田松、一九九六）によると、慶長一〇（一六〇五）年までは、有姓者、すなわち武士層の参宮が半数以上を占めていたのに対して、慶長一二年以降は一変し、無姓者である農民層が半数を占めること、参宮の時期についても、慶長一二年以前はピークが二月～四月で、五月～七月も参宮人が続くのに対して、一二年以後は、二月・三月が第一波となり、九月を頂点に、八月から十一月にピークを迎えること、一二年以後で参宮人が多い時期は農閑期であることから、参宮人の主体の変化が参宮の時期に大きく関係していると指摘している。二つの事例はいずれも伊勢神宮から遠く離れた九州地方の事例であるので、単純な比較はできないものの、寛永期の畿内では、農閑期の三・四月を中心とした伊勢参宮が、すでに定着化していたと考えられる。

以上、「御参宮人帳」をもとに、江戸初期の畿内における伊勢信仰について予察的な考察を行なった。この史料が従来あまり明らかでなかった畿内における伊勢信仰の実態を復原できる史料であること、そして江戸中後期に畿内でみられた伊勢信仰の形態が江戸初期

にまで遡る可能性があることなどを指摘した。しかしながら、江戸初期における信仰伝播の過程を解明するには、講を組織化した、より小さな地域、すなわち村レベルでの社会・経済的分析が必要である。この点については他日を期したい。

【付記】

本稿作成にあたり、三重県伊勢市の来田尚親氏には貴重な資料の閲覧と翻刻をお許し頂きました。本稿は平成一四年度に文部科学省内地研究員として筑波大学歴史・人類学系で行なった研究成果の一部である。石井英也先生、小口千明先生には研究上の便宜をはかって頂き、また有益なご助言を頂きました。筑波大学歴史・人類学系の山澤 学氏には翻刻にあたりご協力頂いたほか、種々ご教示頂きました。群馬大学名誉教授の西垣晴次先生には伊勢神宮関係の史料について種々ご教示頂きました。上野市文化財専門委員の福井健二先生、島根大学法文学部卒業生の外田洋君には、島根大学法文学部地理学研究室地理学実習の際に種々ご教示頂きました。名古屋大学附属図書館、神戸市文書館、筑波大学附属図書館、伊勢市立図書館では貴重な文献、史料を閲覧させて頂きました。以上、記してお礼申し上げます。

なお、本稿の作成には文部科学省科学研究費補助金（奨励研究A「中・近世移行期における伊勢信仰の地域的展開に関する研究」、平成二一～二三年度）の一部を使用した。

〔注〕

- (1) 伊勢安濃津藩。
- (2) 越後高田藩、松平光長。
- (3) 陸奥白河藩、丹羽長重。
- (4) 拙稿(二〇〇〇)では、本史料「御参宮人帳」の作成年代を安永七(一七七八)年と推定していたが、平成一四(二〇〇二)年に名古屋大学附属図書館神宮皇學館文庫の寛永七年「太神宮道者御祓賦帳」を調査した後、分析した結果、「御参宮人帳」に記載される人名とかなり一致がみられることが判明した。したがって、前稿での記載は誤りである。
- (5) 「太神宮道者御祓賦帳」には、本史料に多数記載される畿内農村の百姓よりむしろ、全国各地の藩に仕官した武士の記載が多くみられる。これについては別稿を準備している。
- (6) 神戸市北区内田正一氏所蔵文書(旧撰津国八部郡西小部村・庄屋)には、来田新左衛門家からの書状がみられる。来田新左衛門が庄屋内田彦兵衛に宛てた書状には、毎年恒例の御祓大麻などを進上したことが書かれている。宛先以外は刷られている。折紙、切紙の両方がある。いずれも九月吉日のもので、寛永期の「太神宮道者御祓賦帳」が九月吉日に作成されたのとは符合する。書状は御師の代官が檀那へ御祓・土産などを配った際に添えられたものと考えられる。史料は神戸市文書館で閲覧した。
- (7) ある特定の時期に宿泊者が集中することに対して、御師がどのように対応してきたかについては、門前町の景観を検討するにあたって重要なポイントとなると考えられる。これについて

も別稿を準備している。

- (8) 「天正十六年参宮帳」(外宮御師福嶋御塩焼大夫)のうち、天正一七年をみると、豊後南郡志賀伊勢入道の代参として三重庄矢野掃部助が「十二月廿七日ヨリ正月一日までたいりう(滞留)有也」とあることから、この参宮も年越参りであると考えられる。

〔文献〕

- 萩原龍夫(一九六二)『中世祭祀組織の研究』、吉川弘文館。
- 大分県史料刊行会編(一九六四)『大分県史料 第二五卷』、大分県史料刊行会。
- 分県史料刊行会。
- 神戸市教育委員会編(一九七八)『神戸市文献史料 第一卷』、神戸市教育委員会。
- 神戸市教育委員会編(一九七九)『神戸市文献史料 第二卷』、神戸市教育委員会。
- 下村 效(一九八二)『戦国・織豊期の社会と文化』、吉川弘文館。
- 新城常三(一九八二)『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』、塙書房。
- 西垣晴次(一九八三)『お伊勢まいり』、岩波書店。
- 中村勝利(一九八五)『三重県郷土資料叢書第八六集 藤堂家(津・久居)功臣録・分限録』、三重県郷土資料刊行会。
- 久保文武(一九八六)『伊賀史叢考』、伊賀郷土史研究会。
- 皇學館大學史料編纂所編(一九八六)『神宮御師資料―外宮篇

四一、皇學館大學出版部。

西山 克(一九八七) …『道者と地下人―中世末期の伊勢』、吉川弘文館。

城陽市教育委員会編(一九八八) …『史料が語る城陽近世史―第三集・寺田地域編―』、城陽市教育委員会。

藤本利治(一九八九) …『歴史時代の集落と交通―三重県を中心として―』、地人書房。

久田松和則(一九九六) …九州地方に於ける伊勢信仰の受容と展開(一)―その実態・参宮者の数と村―、皇學館大學神道研究所紀要第十二輯、一七九―二二二頁。

久田松和則(一九九七) …九州地方に於ける伊勢信仰の受容と展開(二)―伊勢参宮と社会経済との関係―、皇學館大學神道研究所紀要第十三輯、一八一―二二七頁。

深谷克己(二〇〇二) …『津藩』、吉川弘文館。

上野市古文文献刊行会編(二〇〇〇) …『公室年譜略―藤堂藩初期史料』、清文堂出版。

拙稿(一九九九) …伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(一)―延宝五年江戸・関東御祓配帳(一)―、社会システム論集、第四号、一―三三頁。

拙稿(二〇〇〇) …伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(二)―延宝五年江戸・関東御祓配帳(二)―、社会システム論集、第五号、一―三一頁。

拙稿(二〇〇一) …伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(三)―貞享二年江戸御祓配帳―、社会システム論集、第六号、一九―五二頁。

拙稿(二〇〇三) …江戸初期畿内農村における伊勢信仰の拡大―山城国久世郡寺田村を中心に―(発表要旨)、歴史地理学四五―四、四四―四五頁。

凡例

一、本稿は、平成一一(一九九九)年―平成一三(二〇〇一)年刊行の『島根大学法文学部紀要 社会システム論集』第四号―第六号に掲載した「伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(一)―(三)―」に続くものである。
一、翻刻にあたっての原則は第六号までと同じである。

〔寛永一二年〕 御参宮人帳(断簡)

〔前欠〕

○丹波氷上郡水町三方 六人

廿四匁 御神楽銭 中村二郎大夫殿

拾八匁 御坊布施 六人分

松大郎殿

与七殿

式匁式分 御札

正月朔日

○丹波氷上郡池ノ尻 五人

十五匁 御坊布施 五人分

久左衛門殿

源右衛門殿

彦市殿

忝勿忝分

御礼

正月朔日

百文

借シ錢

久二郎殿

○小倭山田野 三人
(三重県志郡白山町山田野)

三斗三升

久左衛門殿

四勿忝分

久五郎殿

正月朔日

正月朔日

孫作殿

○丹波龜山 壹人
(京都府亀岡市)

四勿

新三郎殿

正月朔日

式斗式升

庄二郎殿

○丹波土田 十人
(京都府亀岡市大井町土田)

式石

与七郎殿

正月朔日

壹斗六升

初作殿

正月朔日

清三郎殿

正月朔日

○大和高安 壹人
(奈良県生駒郡斑鳩町高安)

喜兵衛殿

式勿

御礼

正月朔日

式斗

喜兵衛殿

○小倭稻掛 九人
(三重県志郡白山町稲掛)

九斗九升

長兵衛殿

正月朔日

三六殿

正月朔日

角兵衛殿

○伊賀長疋 式人
(奈良県添上郡月ヶ瀬村長疋)

四斗

作次殿

喜作殿

正月朔日

○山城大川原 (京都府相楽郡南山城村南大河原・北大河原) 二人

四斗式升

弥大郎殿

源藏殿

正月朔日

○山城吐師 (京都府相楽郡木津町吐師) 二人

三斗式升

久介殿

重介殿

正月朔日

○山城稻八妻 (京都府相楽郡精華町北稻八間・南稻八間) 四人

六斗四升

宗五郎殿

源五郎殿

正月朔日

○山城西岡大原野 (京都府向日市大原野) 一人

式匁老分

忠右衛門殿

正月朔日

○因幡若桜郡ミくら (鳥取県八頭郡若桜町三倉) 一人

三匁三分

三四郎殿

正月朔日

○播磨賀西郡繁昌村 (兵庫県加西市繁昌町) 九人

六匁

半御供錢 助右衛門殿と

拾七匁五分

七人分 弥兵衛殿

長右衛門殿

庄二郎殿

又十郎殿

替
五匁 二人分

百五十文

借錢 同人

三匁

御礼

正月朔日

杉原老束 (京都市) 京紙屋徳右衛門殿と御はつほ

正月朔日

○鳥羽衆 (三重県鳥羽市) 五人

八木老石

小川佐左衛門殿

式百文

御樽

八十文

御はつほ

正月朔日

○津国須磨 (兵庫県神戸市須磨区) 二人

四匁

長左衛門殿

善左衛門殿

正月朔日

○伊賀上野(三重県上野市) 老人

拾二匁 加納藤左衛門殿御代参 彦市殿

拾三匁 同 弥兵衛殿 御月参御初尾

百五十文 御はつほ

墨二丁 同

御鏡一面 同

正月十日

○大和法隆寺(奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺) 老人

拾七匁二分 御大工 多左衛門殿

正月十日

○京衆(京都市) 四人

廿匁 上月作兵衛殿

同 御内義

木綿踏破 二足 加地朔庵老

佐兵衛殿

御鏡壹面 御はつほ

八十七文 御はつほ

拾二匁 御供銭 作兵衛殿

正月十日

但大和法隆寺より御出生ノ衆也

○江戸衆(東京都) 拾一人

廿四匁 御神楽銭

拾二匁 御供銭

拾二匁 御神馬銭

九拾六匁 御講衆八人分

拾八匁 供衆三人分

卅匁 御礼 清左衛門殿

九郎助殿

拾五匁 同

拾五匁 同

拾五匁 馬ノ御礼

三百文 送酒迎御礼

六匁 送酒迎御礼

正月十八日

○山城(京都府宇治市五ヶ庄上村) 五ヶ庄ノ内上村 十一人

壹石二斗 八人分 久右衛門殿

拾匁 三人分 又兵衛殿

三斗京弁 御礼 与右衛門殿

百文 同

百文 同

式百文

御はつほ

正月十九日

○津国能勢下山内(大阪府豊能郡能勢町山内) 三人

式斗八升

孫右衛門殿

又六殿

三匁

一人分

正月十九日

○津国水戸(兵庫県尼崎市水堂力) 一人

金壹分

庄兵衛殿

四匁三分

正月廿二日

○小倭藤(三重県志都白山町藤) 二人

壹斗式升

徳善房

大師房

正月廿七日

○因幡岩井あらいかふら嶋(鳥取県岩美郡岩美町洗井無題) 一人

三斗

藤兵衛殿

正月晦日

○山城大鳳寺(京都府宇治市虎道) 二人

拾二匁

御神馬錢

五匁

御はつほ

扇子 一箱

才田惣兵衛殿

八匁

同人

式匁三分

才田六左衛門殿と御はつほ

二月二日

○津国常光寺(兵庫県尼崎市常光寺) 十人

卅匁

与左衛門殿

二郎兵衛殿

庄兵衛殿

拾匁

御初尾

五匁

御礼

三匁

同

二匁

同

三匁

帰酒迎御礼

二月十日

(大阪府大阪市西区江之子島)
大坂えのこ嶋吉右衛門殿子息

百文

かし錢

善吉殿

二月九日

○丹波氷上郡北田井(兵庫県氷上郡氷上町賀茂) 五人

替
拾五匁

孫右衛門殿

孫助殿

替
一匁

御礼

替
三匁
はた足ノ御立願

二月十一日

○津国尼崎別所(兵庫県尼崎市) 五人

廿五匁

御坊布施 長兵衛殿

太右衛門殿
庄兵衛殿

廿匁

御礼

拾匁

同

五匁

同

貳匁

帰酒迎御礼

二月十五日

○丹波甘田郡奥山(京都府天田郡夜久野町カ) 三人

替
九匁六分

弥三郎殿

彦四郎殿

二月十六日

○津国尼崎(兵庫県尼崎市) 八人

四拾匁

御坊布施 つか口や五郎左衛門殿

二右衛門殿

善兵衛殿

卅匁 御礼

拾匁 同

五匁 同

拾三匁 御神楽銭

壹匁三分 御はつほ

百文 御礼 御講屋つか口や五郎左衛門殿

百文 御礼 五右衛門殿

百文 御はつほ 二右衛門殿

貳百文 御はつほ 五郎作殿

貳百文 御はつほ 清右衛門殿

八拾一文 御はつほ

二匁 馬ノ御礼

二匁 御講中御はつほ

三匁 帰酒迎御礼

二月十六日

○山城寺田(京都府城陽市寺田) 拾七人

拾二匁 御神馬銭

九匁三分 御初尾 七兵衛殿

五百文 御礼

三百文 同

貳百文 同

百文 はい衆方御礼

百文 御はつほ

百文 御はつほ
京弁 式石六斗 御講衆 十三人分
甚左衛門殿

善吉殿
二郎右衛門殿
宇右衛門殿

同 四斗 百文
はい衆 四人分
送酒迎御礼

二月十六日

廿一匁 新九郎殿
○丹波甘田郡野小倉(京都府天田郡夜久野町小倉カ) 七人
内十七匁五分濟 甚九郎殿

替 三匁五分 御礼
老匁 御礼

二月十七日

○山城寺田北ノ小路 卅六人(京都府城陽市寺田)

京弁 五石六斗 御講衆廿八人分 多兵衛殿
長兵衛殿

同 八斗 はい衆八人分 久左衛門殿

拾二匁 御神馬錢
廿老匁五分 御礼

五匁 同
五匁 同
式百文 はい衆方御礼
老匁式分 御代参 久左衛門殿方
式百文 川端へ酒ノ御礼
百文 御はつほ
拾式匁 御神馬錢 九左衛門殿
式百文 送酒ノ御礼
式百文 御はつほ

二月十九日

京弁 式石八斗 御講衆拾四人分 三右衛門殿
○山城寺田北ノ小路 拾四人(京都府城陽市寺田)
七兵衛殿

拾式匁 御神馬錢
五匁 御礼
三匁。 同
拾式匁 御礼
百文 御はつほ
百文 川端酒ノ御礼
百文 送酒迎御礼
百文 御はつほ

二月十九日

○山城寺田北ノ小路(京都府城陽市寺田) 八人

壹石六斗 御講衆八人分 佐右衛門殿

作左衛門殿

式百文 御礼

百文 同

百文 同

六匁 半御供錢 久左衛門殿

百文 御はつほ

百文 川端酒ノ御礼

壹匁七分 送酒迎御礼

百文 御はつほ

二月十九日

○房州岩井ふくろ(千葉県安房郡鋸南町岩井釜) 一人

津国長洲衆(兵庫県尼崎市)

金壹分 喜四郎殿

三匁式分 同人

二月廿二日

○山城五ヶ庄ノ内上村(京都府宇治市五ヶ庄上村) 十五人

六斗 三人分 庄五郎殿

庄三郎殿

又八郎殿

拾匁 御礼 三人御衆方

京升
○山城寺田北ノ小路(京都府城陽市寺田) 十二人分 二郎兵衛殿

壹石八斗 御礼 惣中方

三百文 同

式百文 同

式百文 御はつほ

二月廿五日

○津国中嶋蕪嶋衆(大阪府大阪市西淀川区蕪嶋) 十七人

六拾八匁 御坊布施 与次平殿

喜兵衛殿

拾匁 御礼

四匁三分 同

式匁 同

壹匁 送酒迎御礼

馬方一人分

二月廿六日

○江戸はたごや町衆(東京都千代田区外神田方) 三人

津国難波衆也 御初尾御講中 甚右衛門殿

金壹分 御神馬錢 同

拾貳匁 御神馬錢 久左衛門殿

拾貳匁 御神馬錢 助作殿

金壹分 御供錢 忠三郎殿

金貳分

助作殿

金貳分

長兵衛殿

金壹分

忠三郎殿

貳匁

御はつほ

金壹分

御札

二月廿七日

○大和笠目新町 十人

(奈良県生駒郡安堵町笠目)

壹石

佐兵衛殿

甚助殿

市助殿

三月二日

○因幡若桜中町 二一人

(鳥取県八頭郡若桜町若桜)

六匁六分

吉助殿

宗十郎殿

三月四日

○因幡中養老 壹人

(鳥取県鳥取市中大路九)

貳斗

孫兵衛殿子息

三月四日

○大和三輪 九人

(奈良県桜井市三輪)

四斗

二人分 重三郎殿

五斗四升

五人分

同御内義

銀壹分一ツ

御札

五十文

馬方一人分

三月四日

○山城大鳳寺 拾一人

(京都府宇治市鬼道)

拾八匁

御神馬錢 御講中

廿匁

御札 七右衛門殿

長助殿

宗右衛門殿

五百文

御札

拾八匁

御神楽錢 三郎兵衛殿

拾八匁

御神楽錢 甚七殿

壹匁七分

御はつほ 平兵衛殿

茶筌 一筒

七右衛門殿

火箸 一對

長助殿

扇 二本入

三郎兵衛殿

火箸 一對

宗右衛門殿

火箸 一對

七兵衛殿

柿 百

清左衛門殿と

四拾匁

御坊布施 八人分 御講衆

九匁

同 三人分 下人

三月五日

○津国難波(大阪府大阪市浪速区) 十二人

卅六匁

御坊布施 甚兵衛殿

新左衛門殿

百五十文

御はつほ

貳匁

御はつほ

かなな 十

御札

百文

御札

三月五日

○大和高安(奈良県生駒郡斑鳩町高安) 六人

六斗六升

弥藏殿

与助殿

三月六日

○津国難波(大阪府大阪市浪速区) 拾二人

廿四匁

八人分 宗乗老

源左衛門殿

八匁

四人分

百文

御札

三月六日

○山城(京都府宇治市志津川) 廿人

拾貳匁

御供銭

拾二匁

御神馬銭

久兵衛殿

六十匁

廿人分 御坊布施

甚兵衛殿

次郎兵衛殿

休清老

三百文

御札

貳百文

同

百文

同

貳百文

送酒迎御札

三月六日

○大和成願寺(奈良県天理市成願寺町) 二人

貳斗

孫助殿

助十殿

三月六日

○津国難波(大阪府大阪市浪速区) 卅人

八拾七匁

廿九人分

貳匁

一人分 彦兵衛殿

新右衛門殿

三百文

御札

百文

同

百文

同

かなな 廿

御はつほ

百文 御はつほ
百文 御はつほ
百廿文 御はつほ
式匁 御はつほ

三月七日

四拾式匁 御坊布施
○津国中嶋野里 拾四人
(大阪府大阪市西淀川区野里)

七匁 御礼
四匁三分 同
三匁 同
式匁 御初尾 多久殿

三月八日

○大和柳本 廿九人
(奈良県天理市柳本町)

拾式匁 御神馬銭
拾匁 御礼
式匁 同
三匁 御代参 善介殿
百壹匁五分 御坊布施 廿九人分
甚七郎殿

百文 甚蔵殿
送酒迎御礼

三月八日

四拾五匁 御坊ふ七 九人分
又五郎殿
○大和柳本 九人
(奈良県天理市柳本町)

拾二匁 甚七殿
三匁 御神馬銭
百文 御礼
送酒迎御礼

三月八日

○大和柳本 廿八人
(奈良県天理市柳本町)

式石四斗四升 又一郎殿
又五郎殿
又六殿

三月八日

○津国難波 六人
(大阪府大阪市浪速区)

拾八匁 御坊布施 六人分
与左衛門殿
百文 御初尾 善兵衛殿
式匁 御初尾 彦兵衛殿

百文 御礼

三月八日

拾五匁 御坊布施五人分

○津国難波(大阪府大阪市浪速区) 五人

新兵衛殿

百文 御礼

かなな 五 同

百廿文 御はつほ 助左衛門殿

百廿文 御はつほ 惣左衛門殿

三月八日

○津国棕橋(大阪府豊中市庄本町九) 拾三人

式石六斗 清右衛門殿

久右衛門殿

八匁六分 御礼

式匁 同

四匁三分 同

三月九日

○山城天神森田辺(京都府京田辺市) 卅八人

拾式匁 御神馬錢 重左衛門殿

六匁 半御供錢 同人

廿匁 御礼

五匁 同

五匁京弁 同

式石八斗 御講衆拾四人分

重左衛門殿

茂右衛門殿

七斗五升小弁 はい衆五人分

式石式斗京弁 御講衆十一人分

小助殿

壹斗式升小弁 はい衆八人分

拾五匁 御礼

五匁 同

三匁 同

三月九日

○丹波舟江郡志はか(京都府船井郡日吉町志和賀) 廿七人

廿四匁 御神楽錢 御講中

卅六匁 御供錢 三人分

兵左衛門殿

喜介殿

又左衛門殿

八匁 御礼

三百文 同

式百文 同

式百文 送酒迎御礼

百文 川端酒ノ御礼

五石四斗 御講衆十八人分

又左衛門殿

弥平次殿

弥左衛門殿

老石八斗 はい衆九人分

長三郎殿

三月十日

○丹波舟江郡八木(京都府船井郡八木町八木) 五拾四人

廿四匁 御神楽銭 御講中

拾貳匁 御供銭 同

拾貳匁 御供銭 伝左衛門殿

老貫文 御礼

貳百文 同

三百文。 同

貳百文 在者ノ御はつほ

貳百文 送酒迎御礼

百文 川端酒ノ御礼

貳石五斗六升 御講衆八人分

甚兵衛殿

六斗四升 はい衆四人分

同人

三石五斗貳升 御講衆拾壹人分

九斗六升 はい衆六人分

同人

布式端老斗六升代 はい衆一人分

貳石八斗八升 御講衆九人分

二郎右衛門殿

六斗四升 はい衆四人分

同人

三石貳斗 御講衆拾人分

小助殿

老斗六升 はい衆壹人分

同人

鏡二面 御はつほ

脇指老 御はつほ

三月十日

○播磨とま(兵庫県姫路市苦輪) 拾三人

廿四匁 御神楽銭

卅九匁 御坊布施

長兵衛殿

弥右衛門殿

五匁 御礼

貳匁 同

貳匁。 同

式匁 夜酒ノ御礼
壹匁五分 御はつほ 五郎大夫殿方

三月十日

○播磨(兵庫県姫路市の形町の形)的形 拾四人

廿四匁 御神楽銭
五拾六匁 御坊布施 十四人分
忠大夫殿

善九郎殿

五匁 御礼

三匁 同

式匁 同

式匁 夜酒ノ御礼

三匁 送酒迎御礼

壹匁五分 馬ノ御礼

三月十一日

○丹波水(兵庫県水上郡水上町成松)上郡成松町市場 七拾人

廿四匁 御神楽銭

拾匁 御礼

五匁 同

三匁 同

拾二匁 御供銭 理兵衛殿

拾二匁 馬ノ御礼

五匁 送酒迎御礼
八拾五匁 御講衆十七人分
五匁ツ 三郎右衛門殿

仁藏殿

五拾四匁三匁ツ はい衆十八人分

三拾七匁五分式匁五分ツ はい衆十五人分

九匁三匁ツ はい衆三人分

六藏殿

甚三郎殿

四拾二匁五分替 はい衆十七人分

三郎右衛門殿

仁右衛門殿

壹匁二分 御はつほ

五分 御はつほ

壹匁二分 御はつほ

壹匁二分 御はつほ

鏡二面 御はつほ

三月十二日

○山城(京都府京都市山科区西野山)城西ノ山 拾六人

拾二匁 御供銭

三百文京弁 御礼 近藤又三郎殿

式斗五升 同人

同

式石壹斗

百文

壹貫文

式百文。

十四人分 久作殿
一人分 久三郎殿

三月十二日

○山城野尻(京都府八幡市野尻) 拾七人

拾二匁

拾五匁

三匁

式匁。

三石四斗

代銀八拾五匁濟申候

四匁三分

御神馬錢
御札

同

同

御坊ふ七 十四人分

送酒迎御札

三月十二日

○和泉堀上(大阪府堺市堀上町) 九人

壹石八斗

六匁

四匁

式匁

御坊布施 長兵衛殿

仁右衛門殿

半御供錢

御札

同

三月十三日

○津国能勢上山田(大阪府能勢郡能勢町山田) 卅六人

五石八斗八升

此内式石八斗ノ代ニ
四拾匁濟一人前式斗八升ツ、

九兵衛殿

御講衆 廿一人分

半右衛門殿

残 三石八升

式石壹斗

廿四匁

三百文

式百文

百文。

拾二匁

式匁

四百七文

三匁八分

壹匁

はい衆 十五人分

御神楽錢

御札

同

同

御神楽錢 理兵衛殿

御代参

御はつほ 甚助殿

御はつほ

三月十三日

○伊賀石打(奈良県添上郡月ヶ瀬町石打) 拾五人

三石七斗五升

長右衛門殿

多左衛門殿

喜七郎殿

壹貫文

三百文。

御札

御札

三月十四日

○大和かさめ (奈良県生駒郡安堵町笠目) 八人

八斗

甚二郎殿

庄五郎殿

助左衛門殿

たら 二束 御礼 同人ら

三月十四日

○津国主原 (大阪府茨木市主原町) 拾九人

三石八斗

忠右衛門殿

甚左衛門殿

彦右衛門殿

廿匁

御礼

三百文

同

五百文

同

貳百文

在者ノ御礼

三月十四日

○津国沼ともゆき (兵庫県尼崎市野間友行)

八人

壹石六斗

西右衛門殿

忠右衛門殿

忠兵衛殿

九匁

御初尾

五匁

御礼

貳匁

同

貳匁

同 御はつほ

三月十五日

○丹波甘田郡奥山 (京都府天田郡夜久野町カ) 四人

替 拾壹匁八分

又左衛門殿

同内義

三百文 かし錢

三月十五日

○大和神屋 (奈良県) 三人

三斗

孫七殿

孫六殿

三月十六日

○山城高尾 (京都府京都市右京区) 廿一人

百四拾四匁二分 御神馬錢 十二疋分

久右衛門殿

庄二郎殿

御礼 同人

御神馬錢

御神馬錢

御神馬錢 源左衛門殿

替 百文

拾匁 六月御参宮ノ時 濟申候

御神馬錢

八百文 御礼
 百文 同
 百文 同
 式百文 朝熊酒迎御礼
 百廿文 馬ノ御礼
 三石壹斗五升 御坊布施廿一人分
 式斗壹升 惣中御礼

三月十六日

津国(兵庫県尼崎市大物町)尼崎大物ノ田畑 拾人

拾二匁 御礼
 八匁 同
 同 同
 四拾匁 御坊布施
 二匁 御はつほ 六右衛門殿
 二匁 同 長二郎殿
 二匁 御はつほ たつみ孫右衛門殿
 百文 御礼 伝介殿
 三匁 送酒迎御礼
 三匁 送酒迎御礼
 卅文 御はつほ

三月十六日

○津国(兵庫県伊丹市野間)沼 六人

六匁 御礼
 式匁 同
 壹匁六分。 同
 三匁 御はつほ 伊丹岡田猪左衛門殿
 十文 御はつほ
 壹石式斗 理右衛門殿
 多兵衛殿
 甚兵衛殿

三月十六日

○播州(兵庫県姫路市北条)北條 壹人

四匁 三右衛門殿

三月十七日

肥後(合志)郡銀山ニ御入候 壹人
 津国須磨前田勝大夫殿ノ御衆也

六匁 田嶋多左衛門殿
 壹匁 御初尾 同人
 御鏡 御はつほ 鳴野一郎兵衛殿・御母義
 七分 壹面 御はつほ 長井弥三左衛門殿・御内義
 御鏡 壹面 御はつほ
 七分 御はつほ
 壹匁 御はつほ
 五分 御はつほ

三月十七日

○津国多田大井(兵庫県川辺郡猪名川町北田原) 拾四人

廿四匁
御神楽銭

御礼 甚吉殿

喜左衛門殿

久兵衛殿

二匁

同

二匁

同

卅六匁

御講衆 拾三人分

四匁

はい衆 二人分

三月十七日

○大和法隆寺久保(奈良県生駒郡斑鳩町) 六人

六斗

善一郎殿

善二郎殿

三月十七日

○大和法隆寺おとの村(奈良県生駒郡斑鳩町) 五人

五斗

甚五郎殿

庄三郎殿

三月十七日

拾貳匁

御供銭 京四条夷町 藤田新三郎殿

壹匁七分

御はつほ

三月十六日

○丹波氷上郡御野下村(兵庫県氷上郡氷上町小野) 五十四人

廿四匁

御神楽銭 御講中

拾貳匁

御供銭 同

拾二匁

御供銭 市左衛門殿

拾二匁

御供銭 与七殿

拾二匁

御供銭 宗右衛門殿

百四匁

御講衆 廿六人分

庄右衛門殿

市左衛門殿

忠右衛門殿

拾匁

御礼

五匁

同

三匁

同

庄右衛門殿

はい衆廿八人分

市左衛門殿

又右衛門殿

忠右衛門殿

同
廿匁 かし銀

貳匁

馬ノ礼

式匁

送酒迎ノ礼

三月十七日

○山城北稻八妻〔京都府相楽郡精華町北稻八間〕 四十六人

六石九斗

権大夫殿

孫大夫殿

久二郎殿

四斗六升

御礼

三月十七日

○播磨小川〔兵庫県姫路市花田町小川カ〕 卅九人

廿四匁

御神楽銭

百五匁

御講衆 卅五人分

善右衛門殿

三郎右衛門殿

八匁

はい衆 四人分

三百文

御礼

式百文

同

式百文。

同

百文

夜酒迎御礼

百文

馬ノ御礼

三月十八日

○津国成合〔大阪府高槻市成合〕 四拾六人

九石式斗

御坊布施

仁右衛門殿

久左衛門殿

七兵衛殿

文右衛門殿

廿匁

御礼

五匁

同

三匁。

同

五匁

在者ノ御礼

三月十八日

○小倭大村〔三重県志都白山町本木〕 拾一人

壹石壹斗

七大夫殿

源大夫殿

仁右衛門殿

三月十八日

○小倭竹原せき〔三重県志都美杉村竹原瀬木〕 廿一人

式石壹斗式升

加右衛門殿

三三郎殿

吉兵衛殿

廿文

一人分

五百文

御礼

式百文

在者ノ御礼

三月十九日

○播磨屋か新町(兵庫縣姫路市八家) 拾三人

拾貳匁

御神馬錢

久左衛門殿

喜右衛門殿

彦右衛門殿

拾匁

御札

三匁

同

三匁

同

五匁

酒迎二度ノ御札

五拾貳匁

御講衆十三人分

三月廿日

○播磨賀西郡上豊倉(兵庫縣加西市豊倉町) 廿一人

拾貳匁

御半神楽錢

四拾五匁

御講衆 十五人分

与兵衛殿

長右衛門殿

彦十郎殿

御札

同

同

夜酒迎御札

一匁

馬ノ御札

拾六匁

はい衆 八人分

与兵衛殿

長右衛門殿

九百文 かし錢

三月廿日

○播磨賀西郡豊倉(兵庫縣加西市豊倉町) 廿四人

廿四匁

御神楽錢

六十九匁

御講衆 廿三人分

七郎兵衛殿

九郎兵衛殿

はい衆 十一人分

御札

同

同

夜酒迎御札

馬ノ御札

御札 七郎兵衛殿

九郎兵衛殿

七郎兵衛殿

三月廿日

○播磨的形(兵庫縣姫路市の形町的形) 七人

三匁五分
廿五文

御はつほ
茂大夫殿

三月廿日

[以下次号]

○京正親町(京都府京都市上京区) 乗物町衆 五人

廿匁

御坊布施

拾匁

御礼 久助殿

五匁

同 半十郎殿

源右衛門殿

三匁二分。

同 次左衛門殿

庄兵衛殿

壹匁九分

御はつほ 二郎右衛門殿

貳匁壹分

御はつほ 理左衛門殿

叁匁三分

御はつほ

御鏡 壹面

御はつほ 久助殿・御内義b

拾匁

馬ノ御礼 たち・朝熊兩度分

五匁

送酒迎御礼

五匁

送酒迎御礼

百文

御はつほ

香箸

一膳

次左衛門殿

菓子

三月廿日